

## 平成19年10月の解説（週間天気予報）

### 【10月の天候状況】

上旬は本州南岸に前線が停滞し、東日本、西日本では太平洋側を中心に曇りや雨の日が多くなりました。中旬はサハリン付近を通過した低気圧や上空の冷たい空気の影響で北日本や日本海側の地方では曇りや雨の日が多く、西日本では高気圧に覆われて九州を中心に晴れの日が続きました。下旬の前半は高気圧に覆われて西日本を中心に晴れの日が多くなりましたが、後半には前線と台風第20号の影響で全国的に雨が降りました。

月を通しての日照時間は、北日本、西日本日本海側の地方で多く、東日本太平洋側の地方で少なく、そのほかの地方では平年並でした。降水量は北日本から東日本にかけての日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美地方で少なく、そのほかの地方では平年並でした。気温はほぼ全国的に平年より高く、特に西日本では九州を中心に多くの観測地点で平年より2以上高くなりました。

### 【10月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年<sup>（注）</sup>より4ポイント高い75%でした。関東甲信地方では例年より3ポイント低く、北海道、四国、九州北部、九州南部地方では6から13ポイント高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は全ての地方で例年を下回りました。特に関東甲信、中国、九州北部地方では0.5から0.6小さく、全国平均は例年より0.3小さい1.9でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は北海道で例年より0.3小さいほかは、ほぼ例年と同様で全国平均では例年と同じ2.1でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

### 【10月の週間天気予報から】

10月19日、二つの低気圧が本州を南北にはさむようにして通過したため（図1b）、関東地方では各地で10ミリを超す雨量を観測し、東京地方も全域で雨が降りました。ところが週間天気予報ではこの日の雨を予想できませんでした。

図2は、12日（7日前）に発表した予報で使用した予想気圧配置です。低気圧が18日に本州の南海上を通り、19日には日本の東海上まで離れる予想です。

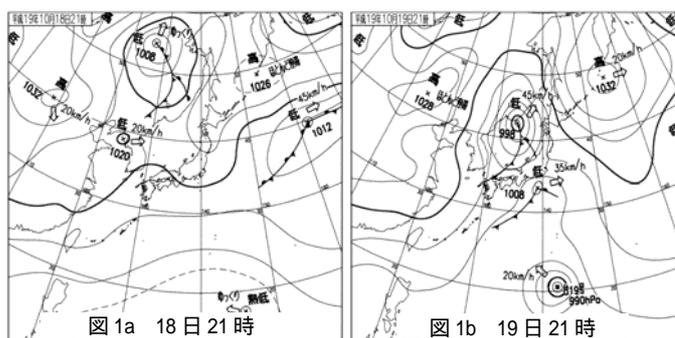


図1 10月18日と19日の実況地上天気図

このため東京地方では 18 日に雨が降り、19 日には天気が回復すると判断しました。

一方、図 3 は 2 日後の 14 日（5 日前）に発表した予報で使用した予想気圧配置です。18 日には低気圧が日本の東海上に離れています。19 日になると日本海北部に低気圧を予想していますが、東日本付近には天気を大きく崩すような要因がありません。そこで東京地方では 19 日には雨が降らないと判断しました。

図 2、図 3 を実況天気図（図 1）と比較すると、どちらも日本付近が気圧の低い部分になることは予想できていますが、個々の低気圧の位置や通過する時期などはかなり違います。19 日に南北二つの低気圧が通過することが予想できたのは、前日の 18 日になってからでした。常に良い精度で大気の状態を予想するために技術の改善に努めていますが、個々の低気圧の発生や動きの予想は、その時々地球を取りまく大気の流れの状態に因ることから、今回のように難しいときと、比較的容易なときがあります。

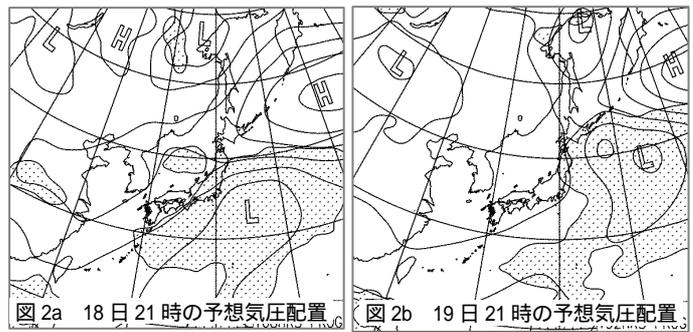


図 2 10月12日の予報で使用した予想気圧配置  
水玉模様は降水が予想される範囲

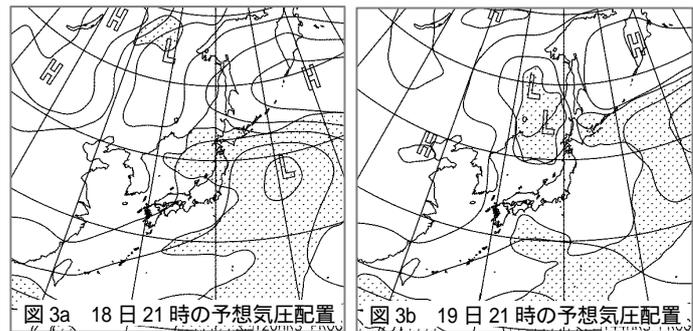


図 3 10月14日の予報で使用した予想気圧配置  
水玉模様は降水が予想される範囲

#### 【12月の週間天気予報の利用にあたって】

12月には低気圧が通り過ぎるごとに北から冷たい空気が流れ込んで寒くなり、北日本では本格的な雪の季節が始まります。北海道では本格的な雪への対策が必要な時期ですが、東北地方より南では雨が降ることも多く、天気予報では降水が雪となるか雨となるかが重要なポイントとなります。

降水が雨となるか雪となるかは、主に地上付近の気温によりますが、湿度や上空の気温などによっても違います。天気予報では雨になるか雪になるかが微妙な場合に、雪になる可能性が大きいときは「雪か雨」（天気マークは雪）、また雨になる可能性が大きいときは「雨か雪」（天気マークは雨）と発表します。雪になると交通機関などに大きな影響がありますので、「雨か雪」の予報が出ているときは、天気マークが雨となっても雪が降る可能性があることに注意して下さい。